

秋元酒汀と明治の日本画（一）

塩谷純

はじめに

- 一、秋元酒汀と文芸誌『山比古』
- 二、挿画からみた『胡沙笛』
- 三、寺崎廣業との交流
- 四、菱田春草との交流（以下、次号以降掲載）
- 五、酒汀の近代日本画コレクション
おわりに

資料1 秋元酒汀宛書簡抄（1）（本号掲載）

資料2 秋元酒汀に関する文献目録（本号掲載）

はじめに

菱田春草（一八七四―一九二一）晩年の代表作《落葉》（明治四二年作）や《黒き猫》（明治四三年作）は、美術の殿様^{ミヤ}の異名をもつ大コレクター細川護立（一八八三―一九七〇）侯爵の蒐集品として知られ、今日も護立が設立した永青文庫に伝えられている。護立の近代日本画コレクションが、自らの優れた審美眼によるものであることはいままでもない。ただ、春草の《落葉》や《黒き猫》をはじめとして、護立蒐集品のうち明治期の日本画の多くは当初から

護立の手にあったわけではなく、元来は秋元酒汀（一八六九―一九四五挿図1）という別の人物によって蒐集されたものだった。護立自身、後年のインタビューで酒汀について次のように回想している。

あれ《落葉》は明治四十二年に出来ているが、買ったのは後です。僕等はまだ展観（文展）の招待日によばれなかった時です。招待日に呼ばれた人がその日に買約されたんですよ。翌日見て、いいなと思ったらもう買約済み。それは流山の味淋の会社の秋元酒汀という人です。この人は美術院のパトロンですから、その人にとられたのでは、とあきらめていたんです。翌年は「猫」《黒き猫》が出ましたが、これも秋本^{アキモト}さんが春草さんの画室で先にきめてしまわれたんです。どうも手も足も出ない。（カッコ内は塩谷による）

千葉県流山の醸造家であった秋元酒汀は、明治の文学界・美術界に通じ、寺崎廣業（一八六六―一九一九）や横山大観（一八六八―一九五八）ら新進日本画家の作品を蒐集、とくに晩年の菱田春草をパトロンとして支えた人物である。酒汀については資料2の文献目録にみるように、主に流山の郷土史家

挿図1 秋元酒汀（明治30年代）

により折にふれその生涯が記され、昭和五六年には流山市郷土資料館で企画展「秋元酒汀と芸術家たち」が開催されているが、蒐集した作品を生前に殆ど手放してしまったこともあり、美術史研究の上ではまず忘れられた存在だったといつてよいだろう。⁽²⁾しかしながら秋元家には今日も書簡を中心とする豊富な資料類が残されており、本稿ではその資料群および郷土史家による先行研究をふまえながら、美術史の立場から秋元酒汀という、明治期の文芸を支えたひとりの人物の姿を祖述することにした。目論見としては、いわゆる「新派」の日本画家をどのような支持層が取り巻いていたのか、従来の作家中心の語りでは追いつけない面を照射できればと思っている。

一、秋元酒汀と文芸誌『山比古』

秋元酒汀は明治二年（一八六九）一月二〇日、流山に四世秋元平八の長男として生まれた。酒汀は号で、幼名は半之助。酒汀の家系は元来矢野の姓で醤油と酒の製造販売を行っていたが、同じく流山で味醂の醸造を営んでいた秋元家と姻戚関係を結んで秋元姓を名乗るようになる。流山は江戸時代より味醂の産地として知られ、酒汀の店で秋元本家が造る味醂の販売を請け負っ

ていたこともあり、先に引用した細川護立の回想にもみられるように、酒汀を味醂の醸造家とする記述は多い。

明治一六年、父の四世平八が隠居し、一四歳の酒汀が家督を継いで五世平八を名乗る。翌一七年には上京して二松学舎に入学、二〇年には東京専門学校（現、早稲田大学）政治科に入学する。東京専門学校で酒汀は、後に博文館の編集局長を務める坪谷善四郎（一八六二―一九四九）と知り合い、坪谷が水哉の号で俳句の道にいそしんでいたことからその影響を受け、「酒汀」の号で俳句に手を染めるようになる。明治二三年には東京専門学校を卒業し、家業に専従するため流山に帰郷、二六年には埼玉県南埼玉郡八幡村の豪農だった豊田寅一郎の長女と結婚する。一方で俳句への志も止み難く、明治二八年に角田竹冷を中心として結成された俳句結社の「秋声会」に参加し、東京へ足繁く通うこととなる。同会には尾崎紅葉や巖谷小波といった当代之の文芸家も参加しており、酒汀にとって当時の文芸界との交わりを深めていく場となったと思われる。

明治の文芸史の上で特筆されるべき酒汀の役割としては、文芸雑誌『山比古』の刊行に大きく関わったことが挙げられる。この『山比古』について、歌人窪田空穂（一八七七―一九六七）は次のように回想している。

私の再従兄に市岡大夢という人があった。二十歳ほど年長で、先代からの東京在住者であった。家運が傾いて、何らかの独立した職業を模索していた。その人の妻は、千葉県流山町の味醂醸造業秋元家の分家の娘で、素封家の聞えがあった。当主は市岡の妻の弟で、酒汀と号し、俳句を作っていた。日本画家の庇護者でもあったそうである。

酒汀は俳句界では、所屬がなかった。自身の機関誌をと思うほどでも

なかったが、自由に発表のできる雑誌はほしかった。費用は洒汀、出版事務は市岡、編集は私という話はすぐに纏まり、題名の「山比古」は洒汀の選で、白鳩社という社名は私であった⁽³⁾。

実際には『山比古』の創刊より以前に白鳩社は出版を手がけており、おそらく同社の処女出版である服部躬治（一八七五—一九二五）の歌集『迦具土』（明治三四年七月刊）の序文には「こたび、白鳩社成れり。こは、肝合へる文学美術家の小団体なりとか」と記されている。同歌集の挿画を担当したのが、与謝野鉄幹の主宰する東京新詩社の機関誌『明星』（明治三三年四月創刊）の表紙や挿画で一躍脚光を浴びた一条成美（一八七七—一九一〇）。しかし一条は鉄幹との不和から新詩社を退社、一条と同郷で親交のあった窪田空穂も『明星』の同人だったが、一条の退社に加え、やはり親交のあった水野葉舟（一八八三—一九四七）が鳳（与謝野）晶子との仲を疑われ同社を追われたのを機に、新詩社から距離を置くようになる。空穂も葉舟も『山比古』の主要メンバーであり、さらに歌集『迦具土』の作者、服部躬治も『明星』初期の主要な寄稿家でありながら新詩社から離反していったことを考えると、白鳩社の成立をめぐるのは、自身の発表の場を確保したいという秋元洒汀の思惑とともに、当初はアンチ新詩社という性格も持ち合わせていたのかもしれない。とはいえ『迦具土』序文にもあるように、文学とともに美術を重視する姿勢は、その清規に「文学美術等の上より新趣味の普及せんことを願ひて、雑誌『明星』を公にす」（『明星』第六号 明治三三年九月）とうたった『明星』の編集方針を明らかに受け継ぐものである。『山比古』の創刊に先立ち、秋元洒汀も明治三四年一二月に句集『胡沙笛』を白鳩社より上梓するが、次章であらためて述べるように、同書もまた一条成美らの挿画によって豊かに

彩られた句集であった。

『草わかば』の作者に」の題で、詩集『草わかば』（新声社 明治三五年一月）を出したばかりの蒲原有明に宛てた島崎藤村の書簡を巻頭に掲載した『山比古』創刊号が出版されたのは、明治三五年五月である。窪田空穂周辺の水野葉舟、吉江孤雁、平塚篤（紫袖）をはじめ、中沢臨川、太田水穂、蒲原有明、小山内薫らが参加。内容は新体詩、短歌、俳句、小説、評論、翻訳等多岐にわたり、明治三七年四月まで続刊した。とくに一〇号（明治三五年二月）の巻頭に掲載された国木田独歩の小説『運命論者』は、日本近代文学史上に『山比古』の名を刻む佳篇として知られている。

『山比古』については、紅野敏郎「雑誌探索 「山比古」の検討」（山梨県立文学館『資料と研究』九・一〇 平成一六年三月・平成一七年三月）で、全二〇号の細目にわたって解題が試みられている。稀覯の雑誌でもあり、美術史研究者の眼にふれる機会も少ないと思われるので、本稿ではとくに同誌の美術に関する部分を抽出して紹介しておく。

『山比古』一〇号（明治三五年六月）には、三宅克己のロンドンからの二月五日付書簡が載る。自伝『思ひ出づるまゝ』（光人社 昭和一三年六月）にもあるように、当時三宅は島崎藤村をはじめ、蒲原有明・国木田独歩・田山花袋・徳富蘆花といった文士との交流を深めていた。創刊号巻頭に掲げられた藤村の書簡中にも、三宅の渡欧のことがふれられている。四号（明治三五年八月）では、東京帝国大学に在籍中の小山内薫が「なでしこ」の筆名で「小草」と題してラスキン『近代画家論』の一節を翻訳。六号（明治三五年一〇月）口絵にはスイスの画家、シャルル・ジロンの画が平田禿木の解題で掲載。また六号から八号（明治三五年一二月）まで中澤弘光の表紙画（挿図2）が同誌を飾る。七号（明治三五年十一月）には「ありあけ」（蒲原有明）と「況後生」

挿図2 『山比古』第六号表紙（中澤弘光画）

の筆名による白馬会第七回展（明治三十五年九月二〇日～一〇月二九日）の展評二篇が掲載。蒲原有明は九号（明治三十六年一月）にも英国の画家ジョージ・フレデリック・ワッツの三連幅「これを女と名づくべし」「誘惑」「悔恨」の口絵解題を執筆。蒲原有明といえはダンテ・ガブリエル・ロセッティへの傾倒が知られているが、『明星』卯歳第一号（明治三十六年一月）の「白馬会評」で、初めてその作品に接し衝撃を受けた青木繁を「氏はかくて白馬会ワッツの称を受けたり」とワッツになぞらえて評している。一八号（明治三十七年一月）では秋元酒汀が「廣業画譜序」を寄せているが、これは第三章であらためてふれることにしよう。

なお七号、八号、および一四号（明治三十六年八月）に「彫塑雑話」と題して石彫材、鑄金術の材体の解説を連載（未完）した佐々木栄多（一四号のみ白雲生の名で執筆）については、『山比古』をめぐる人間関係をうかがう上で特記しておきたい。この佐々木栄多とは、後にアメリカで日本の禅の普及に尽力した曹溪庵佐々木指月（一八八二～一九四五）のことである。佐々木は

東京美術学校彫刻科選科で高村光雲に師事、その息光太郎とも知り合いとなり、光太郎と親交のあった水野葉舟、さらには窪田空穂といった『山比古』の中心メンバーとも交わりを結ぶ。佐々木が禅を志すようになるのも、空穂が再従兄で白鳩社経営者の市岡大夢（伝太）を介して、鎌倉円覚寺管長釈宗演の法嗣である釈宗活（一八七〇～一九五四）を紹介したことによる。当時、釈宗活は東京根岸の御隠殿坂下に禅道場の両忘庵を営み、主として学生を対象に臨済禅の伝道と布教に志しており、後に婦人運動家として活躍する平塚らいてうも同庵に参禅していた。人生について思索することの多かった佐々木栄多も釈宗活の門に入り、指月という道号を得ることになる。⁽⁷⁾ そもそもの両忘庵主釈宗活も、『山比古』にしばしば随想を寄稿していた一人だった。これは、白鳩社の市岡大夢が両忘庵に出入りして、そのマネージャー役を務めていたことと無縁ではないだろう。『山比古』への寄稿の他、宗活は禅門の大意を示した宗教書『性海一滴』（明治三十四年二月）を白鳩社から刊行している。先に引用した窪田空穂の回想にもあるとおり大夢の義弟である酒汀も、明治三十七年には両忘庵に入室参禅したことが、大夢の甥で酒汀のいこでもある市岡晋から酒汀に宛てられた葉書（書簡1）に記されている。⁽⁸⁾ 明治三十八年に大夢は渡米、翌年釈宗活も佐々木指月ら一門を伴い、布教のため北米の地に赴く。この布教活動は結局失敗に終わり、アメリカに一人残った佐々木指月がその後も長らく孤軍奮闘することになるのだが、釈宗活を中心とする「北米両忘会」の活動には酒汀も援助を行っただけでなく、釈宗活ら関係者の書簡や同会関係の文書が今日も秋元家に残されている。なおこの北米への一行中には、両忘庵で参禅していた若き日の萬鉄五郎も含まれていたことを付言しておきたい。⁽⁹⁾

『山比古』の刊行にあたっては、当の秋元酒汀も出資するばかりでなく、

自らの俳句をほぼ毎号のように同誌に寄せるなど、『山比古』を自らの文芸活動の場として積極的に関わった。一七号（明治三六年一月）では「紅葉山人を悼む」の一文を扉に掲載、秋声会の一員として交わり一〇月に歿した尾崎紅葉の死を悼んでいる。一六号（明治三六年一〇月）の消息欄には、モーパッサンの作を因として「いじらしき恋物語」を執筆する旨が報じられているが、結局その発表をみないまま『山比古』は終刊を迎えてしまったようだ。それとは別に、明治三五年一〇月には伝記小説『小野小町』を白鳩社より刊行。また『東京日日新聞』に「号外」（明治三七年二月二日）、「悔悟」（三

挿図3 秋元洒汀（前列左より二人目）と曙輪友会のメンバー

月七日）、「万歳」（三月二日）、「負傷兵」（三月二日）、「斥候兵」（三月二八日）といった日露戦争を背景とする短編小説を寄稿するなど、折あるごとに作品を発表しては自らの創作意欲を満足させていたのであろう。なかでも俳句にかける思いは『山比古』終刊後も止み難く、明治四二年には流山で俳句研究会の「平凡会」を結成、四四年には地方俳誌『平凡』を発刊している。⁽¹⁰⁾

文学に傾倒する一方で、洒汀は多趣味でハイカラなところもあったらしい。明治三三年頃、流山で自転車が行き、曙輪友会なる親睦会が結成されるが、洒汀はその会長を務め（挿図3）、成田山や東京まで遠乗りをしたという。⁽¹¹⁾ また写真にも熱を上げ、秋元家には洒汀の撮影・現像による明治期の写真が多数残されている（挿図4）。明治三〇年代は操作の簡単な乾板法や値段の安い小型写真機の普及によって、営業写真館の写真師たちが写真術を独占していた時代が終わり、写真を手軽なハイカラ趣味として楽しむ素人写真家が登場した時期である。洒汀は秋元本家に入婿した秋元梧楼（一八七七～一九五五）らと、素人写真会を結成し、同会からゴム印画による

挿図4 秋元洒汀撮影 秋元松子（洒汀の娘）ポートレート

山岳写真で写真界にその名を知られた吉野誠（一八八四～一九四六）が巢立っている⁽¹²⁾。

二、挿画からみた『胡沙笛』

文芸雑誌『山比古』の創刊に先立ち、秋元酒汀は白鳩社より自身の俳句集を出版している。『胡沙笛』と題するその句集は、明治三四年一二月に刊行された。縦一八・五センチ、横一一・五センチと、当時詩歌書の判型として流行した縦長の三六判に近い⁽¹³⁾。総一一四頁、俳句の他に、酒汀による短歌と「瘋癲牧師」「悲哀」と題する短文二篇を収めている。『胡沙笛』のタイトルは、自序によればアイヌの奏でる不思議な笛の音に自作の格調をなぞらえたものだという⁽¹⁴⁾。

『胡沙笛』中の句について、たとえば酒汀と交遊のあった大町桂月（一八六九～一九二五）は「概して繊巧にして可憐、や、洪味を欠けども、専門の俳人にあらずして、よく此域にいたれるは、多しとせざるべけんや」（『文芸雑評』『太平洋』三卷一一号 明治三五年三月一七日）と好意的に評している。

一方、本書については昭和三四年に松岡満夫氏が『京都府立大学学術報告人文』一一号に「句集『こさぶえ』について」と題する論考を掲載しているが、これは「句に於ても歌乃至文章に於ても表現の稚拙さが目立つ」と相当に手厳しい。同論考からうかがう限り、松岡氏は著者である秋元酒汀の人物像について特段の情報を持ち合わせておらず、ただ「下手物俳書」である『胡沙笛』が「時代の句いを多分に持っている」ことに興を覚えて筆を執ったものようである。そしてその句いは、同書中にちりばめられた挿画と相俟って放たれる感傷的美感ともいふべきものであると松岡氏は述べている。

酒汀によるテキストの出来はともかく、美術史的な見地からこの『胡沙笛』

を眺めるなら、たしかに同書の挿画は興味をそそるものがある。同じく酒汀の著で白鳩社より出版された『小野小町』（明治三五年一〇月刊）巻末の「白鳩社出版図書要目」から、『胡沙笛』を飾る画を担当したのが寺崎廣業・一条成美・山中古洞の三名であったことがわかる。このうち最も目を引くのが、明治三〇年代の挿画界で一世を風靡した一条成美のものであることは論を俟たない。

前章でもふれたように一条は明治三三年四月創刊の文芸雑誌『明星』でアール・ヌーヴォー調の魅惑的な女性像を表紙や挿画にあらわしてその名を挙げ、『明星』を刊行する東京新詩社を辞した後も精力的に挿画の仕事をした⁽¹⁵⁾。酒汀の『胡沙笛』で一条が手がけたと思われるのは、右上隅に「成」の文字の入った表紙（挿図5）および挿画一六点のうち「成」ないし「成三」のサインの入った六点である。表紙には「胡沙笛」のタイトルに因み、笛を吹くアイヌの老人の姿が描かれる。暗転した地の中にハイライトで像を印象的に浮かび上がらせる表現は、百合の花を手にする裸婦を描き、一条の画名

挿図5 『胡沙笛』表紙（一条成美画）

挿図6 『胡沙笛』挿画（一条成美画）

を轟かせた『明星』の表紙とも共通する。⁽¹⁶⁾ また挿画（挿図6）は、上目使いでこちらに眼差しを向ける女子やキューピット、物憂げな女性像など、世紀末芸術の嗜好を反映して時代の匂いを漂わせ、流行挿画家・一条成美の面目躍如たるところがある。残り一〇点の挿画を担当した山中古洞が酒汀の句をよくふまえて画いているのに対し、一条のそれはテキストと何ら脈絡を見出せず、自立したイメージを作り上げているのも、画家としての矜持を感じさせて興味深い。⁽¹⁷⁾

流行挿画家の一条が秋元酒汀のようなアマチュアの句集を手がけたのは、専ら出版元である白鳩社の人脈によるものだろう。前章でも引いたように、白鳩社の経営者であった市岡大夢は歌人窪田空穂の再従兄にあたり、その社名は空穂が名付けたものだった。一条は空穂と同じ松本の出身で、松本中学在学中に親交を深め、上京後も『明星』を創刊した与謝野鉄幹との間を取り持つなど、空穂の文壇デビューに大きな役割を果たしている。やはり一条が挿画を描いた服部躬治の歌集『迦具土』序文にあるように、創設当初の白鳩社が「肝合へる文学家美術家の小団体」だったとするなら、一条もその有力な一員であったものと思われる。

『胡沙笛』の挿画を手がけたもう一人の画家である山中古洞（二八六九―一九四五）も明治期の挿画界で活躍した人物である。古洞は明治三〇年代に博文館より刊行された諸本の口絵を手がけており、⁽¹⁸⁾ 『胡沙笛』の関与には次章で述べる酒汀と博文館ネットワークとの繋がりが想定される。その一〇点の挿画は、たとえば「戯る、牛の尾細し春の草」「梅雨の窓眼鏡の翁篆刻す」といった酒汀の句に極めて忠実な内容となっている（挿図7）。『胡沙笛』の自序によれば、酒汀は『胡沙笛』以後の句を集めた『ぬれ鷺』を出すつもりであった。結局『ぬれ鷺』は刊行されずに終わったようだが、『胡沙笛』を

贈られた山中古洞が洒汀に宛てた札状（明治三五年一月二日付 書簡2）には、古洞が引き続き『ぬれ鷲』の挿画を担当する予定であったことが記されている。

『胡沙笛』に関わった画家のうち、残る一人の寺崎廣業が手がけたのは、巻頭見開きにわたって掲げられた一点の口絵である。梅花を背景に本の頁を繰る袴姿の女性が、木版色刷によりあらわされている⁽¹⁹⁾（挿図8）。日本画家として名を馳せた寺崎廣業もまた、当時、主に博文館から出版される雑誌や図書の口絵を盛んに手がけていた。廣業は秋元洒汀をめぐる画家の中では早

挿図7 『胡沙笛』挿画（山中古洞画）

くから親交のあった人物であり、その交わりについては次に一章を設けて述べることにしたい。

三、寺崎廣業との交流

今日、秋元家には秋元洒汀宛の寺崎廣業書簡が一四通伝えられているが、中でも最も早いのは、『胡沙笛』の刊行より半年ほど遡る明治三四年六月一日付のものである。内容は廣業を含む総勢一名の名士が流山で洒汀のもとをなしを受けたことへの札状であり、この流山行については、同行した都新聞記者の遅塚麗水が「旅行家懇親会記」と題する記事（明治三四年六月一日～二日付『都新聞』）を載せ、小林天龍が「旅行家懇親会」と題し『萬朝報』明治三四年六月一日～一六日に連載、また大町桂月が「利根川の一日」と題する一文⁽²¹⁾（『太陽』第七卷第八号 明治三四年七月）を、江見水蔭が「流山記」（『太平洋』第二卷第二五・二六号 明治三四年六月二四日・七月一日）を寄せ、田山花袋も後年、自著『一日の行楽』（博文館 大正七年二月）の中で「流山

挿図8 『胡沙笛』口絵（寺崎廣業画）

の舟遊」と題して回想している。麗水と桂月の紀行文はすでに流山の郷土史研究で紹介されているところだが、⁽²²⁾本稿では主に寺崎廣業の立ち振舞いに目を向けながら、あらためてその顛末をうかがうことにしよう。

旅は明治三四年六月八日午後二時、上野停車場から始まる。博文館の坪谷水哉を幹事として、江見水蔭・小林天龍・田山花袋・大町桂月・久保天隨・中内蝶二・国府犀東・遅塚麗水、そして寺崎廣業と弟子の三浦北峽が参集、東道の主人である秋元洒汀に導かれて汽車で松戸まで出、その先は人力車に乗り夕刻には流山へ到着する。一同街中を散策の後、洒汀の宅にて宴席が始

挿図9 寺崎廣業揮毫の襖絵の前で 左より二人目が秋元洒汀、三人目が廣業

まり、酔いもまわって宴酣なるを見計らって洒汀は廣業に揮毫を依頼した。その様子は「大町桂月の記すところによれば、次のようであったという。

主人絹張りの唐紙を指して、廣業の揮毫を請ふ。此時廣業すでに八分の酔を帯びけるが、決然として起ち上り、立てたるまゝ、の唐紙に向ひて、健腕一揮、一大老松を画く。幾度か墨汁の滴るをば、蔦につくり成しつつ、瞬くひまに画成りぬ。流石に当代の名匠の作とて、酔筆ながらも、墨痕淋漓、氣韻生動す。(中略) 酒又十数行、主人更に銀屏風を持ち来りて、画を請ふ。此時には、廣業既に酔へり。わたしやお前にもりつぶされてなど、仮声^{こゝろ}つかひつ、竹を画く。一線ひき終れば、ひとつ歌うたひ、うたひ止んで又筆を走らす、酔愈加はりて、画いよく奇也。(中略) 主人又一つ素縑を展ぶれば、廣業、墨絵の美人を画く、酔愈加はれるまゝ、に、終に筆を投じて、手にて画き、ばた／＼と音たて、掌痕幅上に狼藉たり。墨汁つきて、手に唾して画く。狂態颯爽、画是に至りて奇の極に到しぬ。

宴が終わるや、今度は洒汀の用意した高瀬舟にて川面へと漕ぎ出す。廣業・江見水蔭・中内蝶二の三人が最も酔い最も騒ぎ、仮声^{こゝろ}にて芝居の真似事等をする。遅塚麗水によれば廣業はお軽に扮し、先月に五代目を襲名したばかりの人気役者中村芝翫(後の五代目中村歌右衛門)さながらの口吻であったという。舟を降り、一同舟中の騒ぎに疲れて床に就いた後も、「廣業ひとり眠らず、水を呼び、ビールを呼び、元氣よくさわぎ居りしが、終につかれはて、眠りけむ、ぐうの音も出でずなりぬ」(大町桂月)。

翌朝、一同は廣業が揮毫した老松の襖絵の前で撮影をし、その折の写真が

今も秋元家に残っている(挿図9)。背景の松にはたしかに「幾度か墨汁の滴るをば、蔦につくり成し」た廣業のアクロバティックな筆さばきのあとが見受けられよう。朝食の後は鯉網漁を舟より見物、獲れた鯉を肴に、舟中にて差しつ差されつの酒宴となる。松戸で舟を降り、旅行家懇親会⁽²⁴⁾は解散となったが、廣業ら七名は市川まで足をのばして土産の鯉を肴にまた一夜を飲みあかし、翌朝ようやく東京へ帰ったという。

残念ながら廣業が筆を揮った老松の襖絵は酒汀が生前に手放してしまい、現在秋元家に残る、竹を画いた二曲の銀屏風も銀地焼けで黒化が甚だしい状態にある。その一方で、先にも記したように廣業をはじめ大町桂月・中内蝶二の礼状が同家には伝えられており、なかんずく廣業のそれ(書簡3)は「嬉しまぎれの大酩酊おさハがせいたし何とも御申訳無之右偏に御海恕可被下候」と、もはや礼状というより詫状というべき文面で微笑ましい。

この流山行に関する一連の資料は、当時の文芸家とその支援者との文雅の交わりをリアルに伝えてくれる。同時に、これはすでに山本鉆太郎氏が示唆していることであるが、酒汀宅を訪ねた面々の多くは明治・大正を代表する出版社である博文館とゆかりの深い人物であった。第一章でも述べたように酒汀とは東京専門学校在学時より交遊のあった幹事役の坪谷水哉(善四郎)は博文館の編集局長であり、その水哉が編集を手がける雑誌『太陽』に、やはり同社に所属していた大町桂月が「利根川の一日」と題して、流山行の一部始終を報じている。他にも明治三年に博文館に勤務し、三十九年より雑誌『文章世界』の編集主任を務めた田山花袋をはじめ、江見水蔭・中内蝶二・国府犀東は、いずれも博文館で編集に従事した経歴をもつ文筆家である。画家の寺崎廣業にしても、博文館の支配人であった大橋乙羽とは旧知の仲であった。この流山行にも当然同行して然るべき人物だったが、これに先立つ六

月一日に乙羽は白玉楼中の人となり、行きの車中で一同愴然としてその死を悲しんだと遅塚麗水は記している。また同年九月に廣業は東京美術学校教授に任命されるが、これも生前の乙羽が同学校長となる正木直彦に紹介したことに起因するといわれている。⁽²⁴⁾ともあれ秋元酒汀をめぐる文雅の交わりも博文館ネットワークを抜きにしては考えられず、明治の文芸界におけるその存在の大きさをあらためて認識させてくれよう。⁽²⁵⁾

さて、秋元酒汀と寺崎廣業との交友はその後も続くことになる。前章でもふれたように、明治三四年一二月に刊行された酒汀の句集『胡沙笛』の口絵を廣業が手がけ、また明治三十七年一月刊行の『山比古』一八号には、酒汀が漢文の「廣業画譜序」を寄せている。『廣業画譜 肇輯』が審美書院より上梓されたのは明治四三年七月のことだが、同三十七年一〇月刊行の『日本美術』六九号「美術界近事」には、廣業の天籟画塾で編纂の「廣業画譜」が近日愈々出版の由が記されている。さらにいえば廣業は同三十七年四月から六月にかけて日露戦争に画家として従軍した折、伏見宮貞愛親王に同画譜の題字を、森鷗外に序文を依頼しており、⁽²⁶⁾三十七年前半の段階でその刊行の手筈が進んでいたことがわかる。結果として同画譜には伏見宮の題字、鷗外の序文の他、幸田露伴と「寺崎廣業君の半生」と題する大村西崖の識語が載り、彼らのネームヴァリユーに圧されてか、酒汀の序文が掲げられることはなかった。⁽²⁷⁾

序文こそ載らなかったものの、『廣業画譜 肇輯』には、酒汀が所蔵する作品が一点収録されている。⁽²⁸⁾「下総 秋元酒汀蔵」として「月夜山水」の題で図版掲載されるその画は、図様の一致から、今日、永青文庫に伝わる同題の作品(図版1)とみてよい。水墨による自在な筆捌きながら、その濃淡によりモチーフの遠近を的確に描き分け、なにより林間に分け入って静観するかのような視点の設定は、すぐれて近代的な感性に裏付けられている。

ただ、この《月夜山水》が現在、明治三五年春の第一二回日本絵画協会・第七回日本美術院の連合絵画共進会出品作とされていることは注意を要するだろう。たしかに『日本美術』三八号（明治三五年四月）に載る同共進会の出品目録には、廣業の作として「月夜山水」の題が見えるが、その図版は確認されておらず、作品名が一致すること以外に同定する根拠はない。いっぽう『廣業画譜 肇輯』では、《月夜山水》は廣業の代表作として知られる《王摩詰》（秋田県立近代美術館蔵）や《大仏開眼》（東京藝術大学蔵）と同じ四二歳の作、すなわち明治四〇年の作とされている。秋元洒汀が所持していた《月夜山水》が果たして明治三五年の作であるのか、それとも四〇年の作なのか、ヴァリエティに富む廣業作品において、その作風から制作年を特定するのは至難の業である。ただしその落款に着目するなら《月夜山水》の、とくに「業」の字の五画目が横一線に真つ直ぐ伸びる書体（挿図10）は《王摩詰》や《大仏開眼》といった明治四〇年前後の作に顕著であり、《月夜山水》を明治四〇年の作とする『廣業画譜 肇輯』の記述の方がより信憑性が高いように思われる。

挿図10 寺崎廣業《月夜山水》 落款部分

さらに明治四〇年七月二二日付の廣業による洒汀宛書簡は、蓋し《月夜山水》の来歴を示唆する資料のひとつであろう。その内容は、洒汀が「博覧会出品画寒林之月」を所望し、廣業としては他に譲る約束が破談となったため、博覧会閉会後に洒汀の元に届けようというものである（書簡4）。「博覧会」とは当時上野で開催されていた東京勸業博覧会（明治四〇年三月二〇日～七月三十一日）とみてよい。『美術新報』第六卷第三号（明治四〇年五月二〇日）に掲載された同博覧会の「美術館出品目録」によれば、廣業は一等賞牌を受賞した《王摩詰》とともに「晩秋の月」と題する作を出品している。残念ながら『東京勸業博覧会 美術館出品図録 日本画之部』（審美書院 明治四〇年四月）には「晩秋の月」の図版は掲載されておらず、裏付けには欠くものの、この「晩秋の月」が東京勸業博覧会出品作であることから書簡中の「寒林之月」に当たり、さらに洒汀が所蔵する明治四〇年の作ということで『廣業画譜 肇輯』中の「月夜山水」に該当するのなら、現在永青文庫が所蔵する《月夜山水》は東京勸業博覧会の出品作であると推定されるのである。同博覧会で注目を集めたのはむしろ受賞作となった廣業の《王摩詰》だったが、先約があるにもかかわらず、敢えて《月夜山水》を所望するあたりは、洒汀のこの作品に対する執着ぶりをうかがわせる。それはまた林間に佇むかのような自然観照への志向という点で、二年後に入手することになる菱田春草の《落葉》へのまなざしへと通ずるものであったかもしれない。

洒汀と廣業の交友は廣業の晩年まで継続し、大正六年六月一〇日付の書簡には門人たちと洒汀宅へ参上、相も変わらず大騒ぎをしたことへのお詫びともてなしへの礼が述べられている（書簡5）。また洒汀が廣業の門人ともよく交わったことは、廣業門下生を中心とする美術研精会への関与からもうかがえる。美術研精会は明治三四年に組織された、日本画の育英と研究を目的

とする団体である。⁽³⁰⁾同会が刊行する会誌『研精画誌』二九号(明治四〇年六月)の会員消息には、酒汀が賛助会員として同会の雑誌部へ金五円を寄贈した旨が伝えられている。また同誌には三六号(明治四二年三月)から四四号(明治四三年九月)にかけて断続的に、「流山人」の筆名で「瑤採物語」と題する小説が掲載されるが、これは現在秋元家に酒汀の筆跡による続編の草稿が残されていることから、酒汀の寄稿と考えてよい。この「瑤採物語」は「竹取物語」のパロディを装いながら、かぐや姫ならぬ「みるづ姫」に芸術論を語らせるというものである。さらに『研精画誌』四九号(明治四四年五月)に掲載された第九回美術研精会展覧会(明治四四年三月二三日―四月一九日、於竹之台陳列館)の出品目録によれば、酒汀は「萍」と題する絹本、額尺五寸の作を出品しており、美術研精会においても『山比古』同様、支援にとどまらず画文両面にわたり自らの創作意欲を満たそうとしていたことがうかがえるのである。

酒汀はまた廣業に師事し、美術研精会の幹事として奔走した鳥谷幡山(一八七六―一九五七)とも深い親交を結んだ。そして幡山との交遊はさらに晩年の菱田春草との出会いをもたらしことになる。この機縁については、次章であらためて述べることにしよう。

註

- (1) 細川護立・広田熙・磯野風船子「蒐集懐旧―鼎談 細川コレクションを聞く」(『陶説』一三〇 昭和三九年一月)。酒汀に関する同様の回想は、細川護立「大観追想」(『現代の眼』五八 昭和三四年九月)にもみられる。
- (2) 勅使河原純氏は著書『菱田春草とその時代』(六藝書房 昭和五七年一月)で、秋元酒汀の『落葉』購入のエピソードを紹介している。なお稿者は細川護立に関する論考の中で、すでに酒汀について触れている。塩谷純「細川護立と日本の近代美術」(東京国立博物館他『細川家の至宝 珠玉の永青文庫コレクション』展図録

平成二二年四月)を参照。

- (3) 窪田空穂「わが文学体験」(『窪田空穂全集』第六巻 角川書店 昭和四〇年六月)。同文献は岩波文庫版(窪田空穂『わが文学体験』平成二二年三月)としても刊行。
- (4) 服部躬治と新詩社との離反については、永岡健右「服部躬治ノートI」くさぶえ「剽窃事件を中心として」(『日本大学工業高等学校「研究紀要」四 昭和四五年三月)を参照。
- (5) 同書簡は『藤村全集』第一七巻(筑摩書房 昭和四三年一月)に収録されており、明治三五年一月八日付のものであることがわかる。
- (6) 佐々木指月については、堀正広「ニューヨークの禪者：曹溪庵佐々木指月―海を渡った放浪の禪者」(人間禅出版部『禅』四一六 平成二三年一〇月―一四年四月)を参照。
- (7) 佐々木指月が窪田空穂と知り合い、釈宗活の門に入る経緯については、『思い出す人びと 窪田空穂文学選集・第一巻』(春秋社 昭和三三年一〇月)を参照。
- (8) 市岡家は長野の出であるが、大夢の父晋一郎が明治維新を機に上京し三井組に入社、小金原(現在の千葉県柏市)の開墾に尽力、秋元家とは大夢の兄健吾(晋の父)も酒汀の叔母を妻としており、縁が深かった。市岡家については、市岡朝祐『市岡晋一郎伝』(私家版 昭和四七年)を参照。
- (9) 萬鉄五郎における両忘庵の意義については、田中淳「研究ノート 試論・「新しい女」と「風船を持つ女」―萬鉄五郎『風船を持つ女』の制作背景と表現」(『美術研究』三九八 平成二二年八月)を参照。
- (10) 平凡会については、松本翠影「明治・大正の流山」(『流山を愛す』流山を考える会 昭和五二年七月)、海老原実「希望への道 産業と文化が織りなす郷土誌『流山』」(平成一〇年八月)を参照。松本翠影(一八九一―一九七六)は酒汀に手ほどきを受けた俳人である。
- (11) 註10前掲松本翠影文献
- (12) 吉野誠と流山の写真界については、流山市教育委員会『流山市立博物館調査研究報告書二〇 よみがえる乾板写真 吉野誠の世界』(平成一五年三月)を参照。
- (13) 三六判の流行については、木股知史『画文共鳴 『みだれ髪』から『月に吠える』へ』(岩波書店 平成二〇年一月)を参照。
- (14) 原文は以下の通り。
「こさふえとは、異木の皮を以て作られたりとか聞く、えぞ人のもてりし笛にして、吾れの格調胡沙笛の不思議なる音にも似たらむかと、斯くは題しぬ」
- (15) 一条成美については、註13前掲文献を参照。

(16) 稿者は未見だが、一条は著書『新派彩画法』（新声社 明治三十四年一月）の中で、先ず細い線でデッサンし、次いで光と陰との対照を極端に際立たせるために光の部分の色彩を残し、最後に最も暗い影の部分に濃い色彩を加えて完成するという順序の彩色法を、図版によって教示したという。森口多里『明治大正の洋画』（東京堂 昭和十六年六月）、および註13前掲文献を参照。

(17) 註13前掲文献によれば、『胡沙笛』に先行して一条が装幀を手がけた河井醉茗の詩集『無弦弓』（内外出版協会 明治三十四年一月）では、挿画は全て詩の表現に対応しているが、半年後に白鳩社より刊行された服部躬治『迦具土』では、歌と挿画の結びつきが暗示的であるようになっていくという。

(18) 古洞が口絵を手がけた博文館刊行の諸本は次の通り。

福地桜痴『芳哉義士營』（明治三十四年一月）

同 『山中平九郎』（明治三十五年五月）

同 『花盛劇楓葉』（明治三十六年三月）

江見水蔭『軍事小説武裝乃巻』（明治三十七年五月）

古洞の経歴については、山田奈々子『木版口絵総覧 明治大正期の文学作品を中心として』（文生書院 平成十七年一月）を参照。

(19) 『胡沙笛』の他の挿画は印刷によるものだが、廣業の口絵も含め、その原版となった版木が現在も秋元家に残されている。

(20) 寺崎廣業については、秋田県立近代美術館『生誕一四〇年 寺崎廣業展』図録（平成十八年一月）を参照。

(21) 同文は大町桂月『関東の山水』（博文館 明治四十二年五月）に再録されている。

(22) 山本文男『流山電鉄七十八年 ぬくもりの香る町と人の物語』（流山新聞社 平成六年九月）、山本鉦太郎『流山が描かれている大町桂月の『関東の山水』（『東葛流山研究』二一 平成一五年三月）。

(23) 註22前掲山本鉦太郎氏文献

(24) 添田達嶺『廣業と敬中』（睦月社 昭和三十九年三月）

(25) 近代日本における博文館の意義については、山口昌男『明治出版界の光と闇 博文館の興亡』（『へるめす』四〇 平成四年一月）を参照。同文献は山口昌男『敗者の精神史』（岩波書店 平成七年七月）に再録。

(26) 日露戦争従軍中の廣業の行動については、小高根太郎『従軍画家としての寺崎廣業』（『美術研究』七五 昭和十三年三月）を参照。

(27) なお『廣業画譜 続編』は、永平寺管長、日置黙仙の題詩、正木直彦の序文、大村西崖の題詞を得て、大正六年十二月に審美書院より刊行された。

謝辞

(28) 大正九年一月に画報社より刊行された画集『廣業偉観』には、秋元三左衛門所蔵の絹本着色《天晴》が収録されている。この秋元三左衛門とは秋元本家の十代目である秋元洵綾（一八九〇―一九五五）のこと。洵綾や義兄の秋元梧楼と同様、醸造業を営む傍ら俳句や写真に情熱を注ぎ、絵画蒐集も行っていた。『廣業偉観』に掲載された《天晴》は、雪溪をいだく高山と、その背景の雲海（し）に朝日を望む画で、『天晴』とは味醂をはじめとする秋元家の製品に用いられた商標である。秋元洵綾については、註10前掲海老原実氏文献を参照。

(29) たとえば三越美術館『近代日本画巨匠名作展』図録（昭和五十四年二月）、静岡県立美術館『細川コレクション 日本画の精華』展図録（平成四年九月）。

(30) 美術研精会については、『日本美術院百年史』三巻（平成四年九月）を参照。

本稿の執筆に当たっては、秋元酒汀の孫である秋元由美子氏の一方ならぬご高配を賜りました。挿図1-9、および資料1で掲げた書簡は全て同氏よりご提供いただいたものです。また『廣業偉観』の閲覧については秋元洵綾の孫である秋元美沙江氏の、寺崎廣業《月夜山水》の観覧については永青文庫の三宅秀和氏のご協力を賜りました。ここに記して御礼申し上げます。

資料1 秋元酒汀宛書簡抄（1）

本資料は今日、秋元家に伝わる秋元酒汀関連資料のうち、本稿で言及した秋元酒汀宛書簡について、その全文を掲載したものである。この千件にも及ぶ資料群は、昭和五十六年十一月一日―十二月六日に流山市郷土資料館で開催された企画展「秋元酒汀と芸術家たち」で六六通の書簡の書き下しが配布資料として紹介され、その後秋元由美子氏が整理・書き下しを行い、今日に至っている。本資料の書き下しは同氏によるものである。

書き下しの掲載にあたり、改行部には／を入れた。□内は印文を示す。ただし消印は省略した。

◆書簡1

明治三十七年九月一日付 市岡晋書簡（葉書） ※差出年月日は消印による

〈葉書表〉

S Ichioka

Mr. Howard

2035 Rose st.

North Berkeley

Calif U.S.A

Mr. S. Akimoto.

Nagareyamamachi.

Chibaken

Japan

〈葉書表〉

御両方様をも両忘庵に入室参禅被遊候由実によろこばしう存じ上候大々の大死一番／願ひ上候私は日、一日と天気よろしく世の中面白う相暮し居り候電車の中W.Cの中他人がツクネンと／いたし居るひまに大に大法を親み一人はくそ笑み居り候、(快嚴禪師の)：／提起猫児拶両堂炎天六月勢飛霜。／刀斬却三三九月到西峯影漸長。／夏草や兵者どもの夢のあと(はせを。)

◆書簡2

明治三五年一月一二日付 山中古洞書簡

※差出年は消印による

〈封筒表〉

下総流山町

秋元洒汀先生／侍史

〈封筒裏〉

一月十二日 山中古洞／京橋区豊町十一

〈本文〉

謹啓仕候曩日ハ高／著胡沙笛御送被下／今亦御懇筆の華／翰ニ相接し深謝仕候／胡沙笛全篇近來の／珍たるものと存じ候処／拙画殊ニ赫顔のもの／而已罪萬様ニ

御座候／固より技の未熟ハ申／迄もなく候得共一首毎／ニ斯く迄装を凝／らさ

る、次第とハ夢更／存せざりし為何れも草／画を貴と致し従て／落款をも省き候始／末ニ御座候全く／小／生の粗漏ニ出候次第／不恵御寛容成下され／度次回ぬれ驚の／折ハ是非／前販／を償ふべく存候尚写／生出向の折ハ御厄／介蒙り度希望ニ／御座候／頓首

十二日

古洞拝

秋元洒汀／先生／侍史

◆書簡3

明治三四年六月一〇日付 寺崎廣業書簡

※差出年は消印による

〈封筒表〉

下総国流山町

秋元洒汀様／乞親披

〈封筒裏〉

六月十日

東京下谷区

上野新坂下

寺崎廣業

〈本文〉

拝啓一昨日ハ／推参致非常に／御馳走に相成ことに／昨日の鯉漁ハ未に／嘗てあらざる愉快／いたし／御札筆紙に述かたく／奉銘致候然るに嬉し／まぎれの大酩酊おさ／ハがせいたし何とも御／申訳無之右偏に御／海恕可被下候御家／族中様へも宜敷／御鶴声願上度先つハ／御礼まで如斯候不日御／上京の時もあらハ拝眉／万縷可致候 草々頓首

六月十日 廣業

秋元老兄／梧下

次白かねて御依頼の画は／不日揮毫之上御送／付可仕候

◆書簡4

明治四〇年七月二二日付 寺崎廣業書簡 ※差出年は消印による

〈封筒表〉

下総流山町

秋元洒汀様／梧下

〈封筒裏〉

東京神田

上白壁町五

寺崎廣業

〈本文〉

拝啓尊書拝誦／御意之趣了承仕候／博覧会出品画／寒林之月御望／ミのよし始め
他へ／譲る約束ありしも／都合にて破談いたし／候もの故御望ミに／応して閉会
後／貴家へ御届可申／御所蔵被下候ハ、／幸甚に存し候右御／返事申上候／草々

七月二十二日 廣業

秋元仁兄／梧下

◆書簡5

大正六年六月一〇日付 寺崎廣業書簡 ※差出年は消印による

〈封筒表〉

下総流山町

秋元洒汀殿

〈封筒裏〉

東京小石川関口町百八十寺崎廣業

〈本文〉

拝啓昨日多勢／参上之御馳走に／相成雨中之鯉魚／ひとしほ面白く／門生一同非

常之／喜びにて大さハき／致御迷惑相かけ／御申訳無之何れ／拝顔御礼可申上候
／へとも／不取敢書中／厚く御礼申上候／草々

六月十日 寺崎

秋元賢兄／御下

資料2 秋元洒汀に関する文献目録

〈単行本〉

海老原実『希望への道 産業と文化が織りなす郷土誌』『流山』平成一〇年八

月

〈パンフレット〉

春草会『菱田春草と細川護立氏秋元洒汀氏』昭和四三年五月

流山市郷土資料館『企画展パンフレット第5集 秋元洒汀と芸術家たち 春草・

大観らとともに』昭和五六年一一月

〈雑誌記事〉

松岡満夫 句集「こさぶえ」について『京都府立大学学術報告・人文』一一

昭和三四年一一月

山本鉦太郎 人間ドキュメントここに人あり 情熱の人・秋元洒汀 流山が生

んだ一俳人の波瀾な生涯『流山わがまち』三―三二・三二 昭和五六年一〇

月・一一月

山本鉦太郎 俳人秋元洒汀の生涯 明治・大正時代の流山と文化『流山研究・

におどり』二 昭和五八年七月

小島恵蔵 春草書簡と秋元洒汀・松子さんのこと『下伊那教育』一五八 昭和

六三年九月

小島恵蔵 春草書簡と秋元父娘（洒汀・松子）のこと『伊那』七三七 平成元

年一〇月

山本鉦太郎 流山の俳人 秋元洒汀と日本美術院『東葛流山研究』二一 平成

一五年三月

石垣幸子 秋元洒汀と句集『胡沙笛』 『東葛流山研究』二五 平成一九年三月
松本章三 流山の名士・俳人・文人 秋元洒汀氏生誕百四十年『みどり』六七
―九 平成二一年九月

(しおやじゅん・企画情報部文化形成研究室長)